

巻頭言 本学におけるラーニング・アウトカムズ測定の試み ……1	新機構長あいさつ 学士課程教育機構長 田中亮平 ……2
[AP] 大学教育再生加速プログラム ……2	[GCP] 第3回GCP修了式を開催、2期生・3期生ら30名がGCPを修了 ……3
[SPACE] SPACe学習支援サービスの利用状況 ……4	[WLC] 第8回Global Lecture Series ……5
[WLC] WLC PD Sessions (ワークショップ) ……5	[CETL] 本年度 PASS (Peer Assessment Support Staff) 本格的に始動! ……6
2015年度後期FDセミナー (学士課程教育機構主催) ……7	2015年度 第8回FDセミナー (AP年次報告会)・学士課程教育機構新体制 ……8

本学におけるラーニング・アウトカムズ測定の試み

教務部長 西浦昭雄

本学では2010年度より共通科目における学習成果(ラーニング・アウトカムズ; LOs)の設定と測定に取り組んできた。2014年度の大学基準協会による大学評価(認証評価)において、「長所として特筆すべき事項」として「…8項目のラーニング・アウトカムズを策定し、共通科目のシラバス上で各科目との関連性を明示している。また、科目とそのアウトカムとの対応関係を学士課程教育機構において確認し、達成度の指標を開発していることは、先進的な取り組みとして評価できる」とされた。学習(学修)成果の可視化については、認証評価の第3期にて重要性が増すものと考えられることから、本学の取り組みを概括することで今後のあり方を考察する一助としていきたい。

中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008年12月)では、「各専攻分野を通じて培う学士力」が提唱され、「何を教えたのか」から「何ができるようになるか」といった学習者中心のカリキュラム作りが求められた。2010年4月、高等教育をめぐる環境が変化する中で発足した学士課程教育機構は、本学の理念・目標、輩出する人材像から導き出した共通科目LOs設定に着手し、翌年1月に完成をみた。

本学は、2011・12年度に全学展開への準備として次の3点を実行した。第1は共通科目LOsに関するパイロット授業の実施である。LOsの8項目や11の科目群を網羅する約50の授業で取り組み報告が提出された。第2は、LOsをそれぞれ3~4にブレイクダウンした細目案づくりであった。これは第1次細目案→パイロット授業→第2次細目案→パイロット授業の順で点検・評価を行い、2012年10月に細目(例示)として決定されるに至った。同時にその英語版も作成された。第3はシラバスへの反映である。各授業担当者が2012年度シラバスを入力する際、その授業が該当すると思われるLOsを最大3項目までチェックするというもので、共通科目全シラバスによって行われた。これによりシラバスを参照する学生が、当該科目がどのLOsに関連しているかを認識することが可能になった。それを基に該当する科目数を一覧化した分布表も作成

した結果、8項目全てが年間100以上の授業によってカバーされていることがわかった。

2013年度からは共通科目LOsの全学展開を開始した。それは共通科目全科目において同一教員が続けて担当する場合、3年以内に少なくとも一度は「授業の『到達目標』に関する自己評価報告書」を作成することで、授業改善につなげるという取り組みである。同自己評価報告書では①その「到達目標」に対してどのように取り組んだか、②その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか、③該当LOs項目の3つの視点から各授業で掲げた到達目標ごとに振り返る形式がとられた。

2015年度末までに235の報告書が提出された。その中から参考例を科目群ごとに年2回開催している共通科目担当者会において紹介しあい、教員間での共有化をはかっている。また、2013年度のシラバスからは、該当LOsを入力する際、最重点項目を明記することで、より正確に分布状況を把握することになった。2014年度に実施した共通科目カリキュラム見直しにおいては、LOsで該当科目数が少なかった「4. 日本語による多様な表現方法を習得し、明瞭に論じ述べる」について、「学術文章作法I」を全学必修化することで補った。こうしたLOs測定への試みは専門科目へも広がってきている。各学部におけるLOsの測定に関する取り組みは、2015年度自己点検・評価報告書で公表された。

このように本学では教育面における「内部質保証システム」の確立を目指し、LOsの設定とアセスメントを通じたプログラムレベルと授業レベル双方における改善に取り組んできた。今後は、授業レベルにおいてPDCAサイクルのA(アクション)をどのように保証するかが課題である。この点について、授業アンケートに対する教員コメント機能を活用できないだろうか。「あなたはこの授業のシラバスに書いてある到達目標を、どの程度達成できたと思いますか」という授業アンケート項目の結果を踏まえて教員がコメントし、授業改善に向けたアクションを起こしていくものである。

新機構長あいさつ

学士課程教育機構長 田中亮平

本年4月から、学士課程教育機構長の任命をいただきました。関係諸氏・諸部門の協力をいただきながら、機構のミッションの実現と、更なる発展のために尽力してまいりたいと思っております。

就任に当たり、本機構のミッションを改めて確認させていただきたいと思っております。

本学の学士課程教育機構は2010年4月、教育・学習支援センター（CETL）、共通科目運営センター、ワールドランゲージセンター（WLC）を統合する形で発足しました。組織体としての成り立ちはそのようでありましたが、ミッションの面からいえば、その2年前に出された中教審の答申「学士課程教育の構築に向けて」に対応すべく誕生したものであります。そこで打ち出された「学士力」を具体化し、養成する方途として、3ポリシーに基づく教学マネジメント、学修成果を重視した教育改革、きめ細かな学修指導と厳格な成績評価、教職員の本格的な職能開発などの点を検討したうえで、これらを実行に移すための組織として発足したものです。そこには旧来の共通・専門の枠を超えて、入学から卒業までを学士課程というひとつの全体としてとらえ、総合的な教学マネジメントを推進するという、あらたなコンセプトが根底に示されていました。

以来6年間のうちにさまざまなプロジェクトを実現させて

きました。例を挙げれば、学部間の垣根を越え、外国語力・数理的スキル・論理的思考能力の養成を柱とした学部横断型の課外プログラム、GCPの設置が皮切りとなりました。また従前の教育・学習支援センター（CETL）の学習アドバイジングをはじめとする各種機能に、WLCの外国語学習アドバイジングと留学生とのピアトレーニング機能を追加し、さらに学生の課外学習用施設を統合したラーニングcommons、SPACeも、2013年9月の中央教育棟落成にあわせて開設されました。さらには8項目からなる共通科目ラーニングアウトカムズを策定して、実際の授業科目のシラバスに明記するようにし、あわせて各授業科目で学習成果の検証を実施する仕組みを整えました。この先行的試みに続いて、各学部でもラーニングアウトカムズの策定と、それに基づく科目レベル・プログラムレベルでの学習成果の可視化が進んでいるところです。

こうした成果の上に、今後も高大接続と初年次教育改革、3ポリシーに基づく一貫性を持った学士力養成の仕組みの充実など、さまざまな課題に取り組んでいかなければなりません。関係各位のいっそうのご理解とご支援をお願いする次第です。



大学教育再生加速プログラム（AP）

<http://ap.soka.ac.jp/>



春季教員合宿研修

3月26日（土）
—27日（日）（第1回）、3月28日（月）—29日（火）（第2回）、1泊

2日の春季教員合宿研修「アクティブラーニング推進のための授業設計ワークショップ」を実施し（於：多摩永山情報教育センター）、文学部22名、看護学部21名、教育学部2名、AP推進本部2名の合計47名が参加しました。

夏季研修に引き続き、愛媛大学教育企画室より小林直人先生、仲道雅輝先生、根本淳子先生、加地真弥先生をお招きして、自身の授業に導入するための方法および特徴についてアクティブラーニングを体験しながら学び、最後にグループごとに成果発表を行いました。

アンケートでは、参加された97.6%の教員が「満足だった」、「有益だった」と回答されました。また、「今まで抱いていたアクティブラーニングに対する懸念が払拭され、通常の授業の延長線上に位置づけることができた。特別な名人芸的な工

夫ではなく、もっと自然なものであることがわかったのが大きな収穫だった」、「他の学部の先生の授業を知ることができたのが参考になりました。とても雰囲気が良く、研修を受けやすかったです。やはり、個人ワーク・グループワークをうまく導入されたり、学習環境が整うよう工夫や配慮がされていたりしたと思いました」などの声が寄せられました。

冊子紹介



本学の取り組みポイントや3つのアセスメント科目用ルーブリックを掲載した「大学教育再生加速プログラム事業 教員向けガイド 2016」を作成しました。

第3回GCP修了式を開催、2期生・3期生ら30名がGCPを修了

GCP コーディネーター
教授 佐々木 諭

2016年3月17日、本学の卒業式に先立ち、GCP（グローバル・シティズンシップ・プログラム）開設以来3回目となるGCP修了式が開催されました。1年間の海外留学を経験したGCP2期生と4年間の課程を修了した3期生ら計30名が式典に参加し、馬場学長よりGCP修了書が授与されました。

GCPは、2014年の第1回GCP修了式より、これまでに68人の卒業生を送り出しました。卒業生の進路先は、毎年合格者を輩出している外務省専門職や横浜市役所等の地方自治体への採用、アクセンチュア、日本アイ・ビー・エム、ゴールドマンサックス証券、PwCコンサルティング合同会社等の外資系企業、三菱東京UFJ銀行、日産自動車等の日系企業の就職、ジョーンズ・ホプキンス大学をはじめとする海外の大学院、本学を含む、東京大学、京都大学などの国内大学院への進学など多岐にわたります。

今年の卒業生の中からは、名門大学のオックスフォード大学とシドニー大学の大学院進学を勝ち取ったGCP生がいます。GCP3期生の酒井光一さん（文学部人間学科卒業）は、大学入学時より考古学者になることを志し、海外大学院進学を目指してきました。高校時代に英語科目が苦手でしたが、GCPの英語授業により、2年間でTOEICのスコアを450点以上向上させました。卒業時には、IELTS7.0、TOEIC930点を取得しました。3年次の夏期休暇には、「中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所」が主催するフィールドコースに参加し、トルコで遺跡の発掘調査を行いました。

シドニー大学大学院に進学を予定している若林勇人さん（経済学部経済学科卒業）は、将来はエコノミストとして、世界の貧困削減に貢献することを目指しています。シドニー大学大学院以外にも、オーストラリア国立大学大学院等の名門大学の合格も勝ち取られました。昨年は、みずほ学術振興財団主催の「第56回懸賞論文」学生の部において、同じくGCP経済学部生の新久章さんと応募した論文が最優秀賞にあたる1等を受賞しました。

酒井さん、若林さんいずれも、英語力はもちろんのこと論理的、批判的思考力、リサーチ能力などGCPで徹底的に鍛えた力が、海外大学院の合格に活かされたと語っています。社会に羽ばたいたGCP修了生全員が、同じくGCPで培った力と地球市民の精神を胸に活躍されることを期待しています。

今年4月には、7年目を迎えたGCPにあらたに29名のGCP生を迎えました。それぞれが大きな目標を胸に勉学に挑戦しています。GCPの伝統を受け継ぎ、新しい発展を担いゆくことと楽しみにしています。



7期生の写真



GCPを修了した30名の卒業生



SPACe学習支援サービスの利用状況

総合学習支援センター

SPACe副センター長 山崎めぐみ

● 2016年度が始まりました。SPACeも2013年9月の開設時以来、多くの学生に利用していただいています。2016年5月10日にはSPACe来場者100万人を達成しました。これは開設以来、1日平均1200人ほどの学生に利用していただいている計算になります。午前中は、個別に自習している方が利用して下さっていますし、午後から閉館にかけての時間帯はグループ学習をしている学生の姿が目立ちます。

● SPACeはラーニング・commonsとして学生の学びの場として活用されていると同時に、総合学習支援センターとして様々な学習サービスを提供しています。表1は2015年度（前期・後期）と2016年度の4・5月における学習支援サービス利用人数です。2016年度の学習セミナーは「中間レポート必勝法」「日本語能力試験N1対策講座」「プレゼンの達人になろう」「コミュニケーション力超向上セミナー」や、学部生企画の「簿記入門講座」、英語学習相談室コラボ企画など、新しい試みを行っています。

● 開設以来行っている、レポート診断・レポートチュータリングといった、トレーニングを受けた大学院生スタッフが

担当する、よりよいレポートを作成するためのサービスも利用が増えてきています。2016年度はまだ2ヶ月しか経っていませんが、前年度と比較し、どちらもより多くの学生が利用しています。特に、テーマ設定からレポートの仕上げまでを1対1で対応してくれるチュータリングは、中間レポートの時期も予約がいっぱいでした。

● 学習相談では、学部生スタッフの得意分野を活かし、数学・統計・簿記など数学系の学習支援を行っています。最近では、数学系の授業課題の質問をしに来る学生が増え、うれしうれしいです。また、学部留学生向けに英語で対応できるスタッフもシフトについています。留学などを経験し、自身も異なる環境で学ぶ体験をした人々です。日本語を母語としない、英語で相談したい人への初期対応を行っています。特に、言語が原因で直面している履修や学習についての相談は是非利用して欲しいところです。

● SPACeでは、1年生から4年生まで、どの学年の学生にも対応していますので、より高みを目指している学生がいましたら、是非、学習サービスの利用をすすめてください。

表1 2015年度・2016年度（4・5月）のSPACe学習サービス利用者数

	2015年前期	2015年後期	2016年前期 5月31日現在	合計
学習セミナー	163	104	66	333
レポート診断	242	226	34	502
レポートチュータリング	210	118	118	446
数学チュータリング	80	80	54	214
学習相談	149	104	156	409
合計	844	632	428	1904

SPACe来館者 100万人達成

2013年開設より2年8ヶ月が経過した本年5月10日（火）14：40頃、記念すべきSPACe来場者100万人を達成することが出来ました！

100万人目とその前後賞の3名の学生には、大学を代表して田代康則理事長より図書カードを贈呈させていただきました。

100万人目の見山博子さん（別科1年生）は、「とても驚きました。今後も自身の使命探求に向けてしっかりと勉強します。」と話されました。



第8回 Global Lecture Series

Riyo Yoshioka, Senior Program Officer of Human Rights Watch (HRW) Japan



2015年12月11日、国際人権NGO ヒューマン・ライツ・ウォッチ (HRW) シニアプログラム・オフィサー 吉岡利代氏をお迎えし、第8回Global Lecture Seriesを行いました。

今回の講演で吉岡氏は、人権という観点から何が見えてくるのか、また私達が直面している国際的・国内的な問題について簡潔に論じました。その後、人々を援助し、情報を伝え、政策や制度を変革していく上でHRWの果たす役割を説明し、人権と日常生活の関わり、私達が世界の人々の人権を守る上で果たせる役割、行動する事の意義を強調しました。

吉岡氏は、国際的な問題としてシリア難民危機を取り上げ、人々の人権が日々どの様に侵害されているのかビデオを通じて説明しました。次に、現地での綿密な調査の上で、

声をあげられない難民の思いを世界に届けているHRWの国連での活動を報告しました。シリア国内のみならず、国際的にも人権問題に介入していくための圧力を生み出す事に成功しているのは、HRWのこのような活動の積み重ねであると述べました。

また、国内における人権侵害の実態として、孤児の現実を取り上げ、孤児に対する日本の社会的支援が施設での養護に偏っており、里親委託率が極めて低い事を挙げました。その後Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender (LGBT)の問題を論じ、LGBTへの意識を高めるために高校で行っているHRWの活動について報告しました。その活動は、私たち一人一人が人権尊重の重要性を認識し、それについて語り合う事が大きな変化をもたらすための第一歩となる事を印象づけるものでした。私たちにも社会が抱える問題解決のための糸口を見出し、世界を変えていく力があると確信出来た、意義深い講演となりました。

■ WLC ワークショップ

内容言語統合型学習と相互教授法の融合・ディクトグロス

2015年10月28日、2部構成によるワークショップが行われました。

はじめにモーガン講師から、相互教授法 (Reciprocal Teaching Method) と内容言語統合型学習(Content and Language Integrated Learning)について説明がありました。その後、学生の認知やメタ認知能力向上を目指し、教室内で二つの教授法を融合させるより具体的な方法として、文の要約、明確化、質問作成、展開の予測などのスキ

ル練習法が紹介されました。

次に山本講師による、学習者がリスニング中に取ったノートを基に文章を再現していく「ディクトグロス」という語学教授テクニックについてのプレゼンテーションがありました。学生がお互いに協力してこのタスクを行える点、学生のレベルとタスク成功の関連性、またどんなレベルのクラスでも難易度を調整出来る点など、ディクトグロスの長所が際立った内容となりました。

■ WLC 教員の紹介 マルコム・プレントイス講師



マルコム・プレントイス講師 (通称マルク) はWLCに勤務し、アカデミックファンデーションプログラムのコーディネーターを務めています。1998年に教師となり、2002年の来日以前は、イタリア、チリ、イギリスなどで教鞭を執ってきました。ダラム大学で人類学と心理学の学位を、その後、マンチェスター大学で英語教育の修士号を取得しています。

研究としては、主に二つの分野があります。一つは、自己管理的学習を体験した教師がこの学習法をクラスで進めるにあたり、自らの経験をどう学生に伝え反映して

いくのか。またもう一つは、学生の学びを理解し促進するため、ソフトウェアを使って学習行動を分析する「ラーニング・アナリティクス」です。

ラーニング・アナリティクスの一環として、学生には毎週オンライン学習ポートフォリオをアップしてもらっています。これをデータ化し分析することで、サポートの必要な学生を把握し、自らの学びをコントロールするために必要なプログレス・サマリーを視覚化して学生に提供することが出来ます。

大学教育の最も重要な目的は、教室の外でも、コース終了後も、ひいては大学卒業後も、自身の学びを自ら導き進めていくことの出来る技術を学生に提供する事。これがプレントイス講師の教育哲学です。

■本年度 PASS (Peer Assessment Support Staff) 本格的に始動!

PASS (Peer Assessment Support Staff) とは、「大学教員の授業改善をお手伝いするスタッフ」のことで、PASSの学生は専門スタッフと協力して授業改善のお手伝いをします。具体的には、授業に参加したPASSから学生の声を聞き、授業改善を行い、その活動を通して大学を変えていく取り組みといえます。

学生の視点と大学教員の視点の両方を持ちながら、授業改善を行う——こうしたPASSの育成をCETLとSPACEが協力して3年前に開始しました。

本年度はいよいよ、PASSを利用した授業改善を希望する先生方の授業に入り始めています。

PASSは有償ボランティアですが、PASSとして登録されて活動を行うためには、研修を受けることが必要となります。研修のなかで、学生は授業に対する教員の視点や、授業改善のための情報とはなにか、および、情報収集の方法を座学で学び、さらに、PASSコンサルタントの先生の授業に入りながら、実地で学んでいきます。PASSが収集する授業改善のための情報を大別すると、以下の5つに分けることができます。

- ① 先生の行為・振る舞い（話し方、質問の仕方など）
- ② 授業の内容に関するもの（課題や宿題の出し方など）
- ③ 学習環境（教室の設備など）
- ④ 受講者の授業態度（教師からの働きかけに対する反応など）
- ⑤ 受講者の意見（理解度・満足度など）

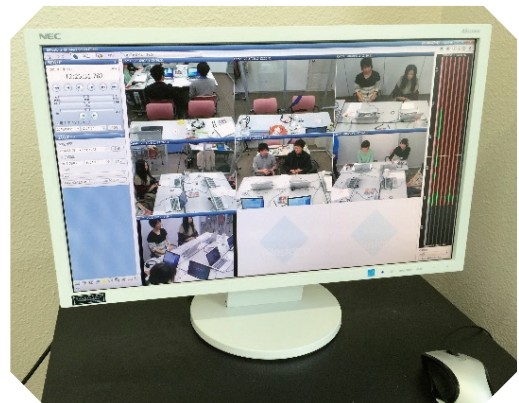
上記の情報収集を、授業改善を希望される先生方の要望に沿う形で、授業の観察、および、学生へのインタビューによって収集します（インタビューの回数は教員の希望による）。また、教員とPASS仲介は、専門スタッフであるCETL所属のPASSコーディネーターとPASSコンサルタントが行います。

学生にとってPASSの活動は、大学の授業改善に貢献できる機会になるだけでなく、学生自身の授業外学習にもなります。観察やインタビューという手法は社会調査の基本であり、学校教員のみならず、ジャーナリストやコンサルタントなどの職種の基本スキルとなるものです。そのため、PASSの活動を通じて学生は将来の仕事に役立つ基礎力を形成していくこともできます。さらに、学生は目上の人に理由を示しながら提案する力や仕事における自分の責任に

ついて認知・判断する力もPASSの活動のなかで養っていきます。

また、このようなPASSの活動は、PASSではない一般学生の授業に対する見方にも波及すると考えられます。すなわち、学生が授業を受ける側という受動的授業観から教員と協同して授業を創るという能動的授業観へ意識が変化する…そうした授業をめぐる文化の変容が本学で起こることが期待できます。

現在、PASSの活動の拠点をC棟501教室（通称C-Lab）において研修会や勉強会などを行っています。C-Labは「協同教育研究推進プロジェクト」（文科省の平成25年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業）で使用していた実験室です。事業期間の3年間に使用した設備（グループ学習記録システム、学習状態を測るための脳波計・脈拍計など）は、グループ学習の観察などに使われます。



学習記録システム

<2016年度CETLセンター員>

◆CETLセンター長 望月 雅光（経営学部）

碓井 健寛（経済学部） 中田 大悟（経済学部）

伊藤 貴雄（文学部） 寒河江光徳（文学部）

井上 伸良（教育学部） 戸田 大樹（教育学部）

田中 博子（看護学部） 佐藤 美香（看護学部）

山崎めぐみ（SEED） 清水 強志（SEED）

オブザーバー

小山 貴之（CETL / SPACE） 黄 若白（CETL / SPACE）

宮原 千咲（CETL / SPACE） 三好 香里（CETL / SPACE）

◆CETL副センター長 西田 哲史（経済学部）

前田 幸男（法学部） 中山 賢司（法学部）

波多野一真（経営学部） 富岡比呂子（教育学部）

井田 旬一（理工学部） 川井 秀樹（理工学部）

ジョハンナ・ズルエタ（国際教養学部）

山下由美子（SEED） 三津村正和（教職大学院）

吉野 和美（CETL / SPACE） 木原 宏子（CETL / SPACE）

青木美寿華（CETL / SPACE）

2015年度後期FDセミナー（学士課程教育機構主催）

◆第3回FDセミナー

講師：山崎めぐみ先生（本学学士課程教育機構 准教授）

9月18日(金)、学士課程教育機構の山崎めぐみ准教授を講師として、「学生とのかかわり方の考え方（アドバイジング）と可能性」のテーマでFDセミナーを開催いたしました。

セミナーでは、アカデミック・アドバイジングの考え方と現状、アドバイザー



の傾向性や課題、アドバイジングにおける具体的な手法や取組みなどについてご講演いただきました。

学内外教職員・学生の参加者からは、「教職員、各担当者との連携・情報共有がいかに大事がよく分かった」「例を紹介して頂き、非常に勉強になった。自身が直面する課題に対する対策方法も学ぶことができた」「社会において一層、特別支援が認知されなければならないと思う」等の声が寄せられました。

◆第4回FDセミナー

講師：小林 直人先生（愛媛大学 教授）

11月6日(金)、愛媛大学 学長特別補佐、教育・学生支援機構副機構長、教育企画室長 小林 直人教授をお招きして、FDセミナーを開催いたしました。

小林先生は、「FDを全学的に動かす試み：愛媛大学での経験から」をテーマに、愛媛大学における授業改善、カリキュラム改善、組織改善等の具体的事例を挙げながら、大学組織における全学的な教育改革の取組みとその課題についてご講演いただきました。

学内外教職員の参加者からは、「愛媛大学に



における具体例を挙げて頂いたことで、自大学の状況を相対化できた。こんな取組みや制度があればいいのと思う部分が多々あった」、「具体的な取組みを直接拝聴できたことで、実感や臨場感ある講演を聞いて非常によかった」等の声が寄せられました。

◆第5回FDセミナー

講師：L. MacDonald先生（本学国際教養学部 教授）／渋谷明子先生（本学文学部 准教授）

2015年12月18日(金)、「特色ある授業実践紹介」をテーマとして、国際教養学部 L. MacDonald教授および文学部 渋谷明子准教授に、マインドマップやディベートの導入などの授業における具体的取り組みやその中での課題・今後の展望についてご報告いただきました。



参加者からは、「2つのプレゼンテーショ

ンともすぐに授業で使えるアイデアを知ることができた」、「インタラクティブな授業をされている素晴らしい内容だった」、「授業の特徴がとても分かりやすく、今後の授業の改善に役立てたいと思う」等の声が寄せられました。



◆第6回FDセミナー(英語)

講師：ジョセフ・ハイリマン先生（本学WLC・講師）

11月25日、「21世紀に働くためにー日本、そして世界で必要とされるスキルを育てるー」のテーマで、WLCのハイリマン講師によるFDセミナーが行われました。

講師はまず、21世紀の国際市場で働くために必要とされるスキルと国内市場で必要とされるスキルを比較し、その類似性また相違点について分析しました。次に、教員が自分たちが教える科目で取り組む事が出来れば、将来学生が職場で活躍するために有効と思われるスキルのリストを発表しました。その後、参加教員が話し合い、問題解決力、情報技術力、協調性、批判的思考力、組織力、創造力、適切に話し書くコミュニケーション力などをリスト化し、学生が必要なスキルを習得するために、教員はそれぞれのクラスで何をすべきかという点について意見交換を行いました。学部レベルでこうい

ったスキルをカリキュラムの一部に加えるかどうかという点とは別に、学生にとってスキル習得は重要であり、各教員がその重要性を認識している事が大切だという結論で締めくくられました。



2015年度 第8回FDセミナー（AP年次報告会）

CETL/SPACE 助教 小山貴之

2016年2月26日、2015年度第8回創価大学FDセミナー（本学FD委員会主催）として、「大学教育再生加速プログラム（AP事業） AP年次報告会」が本学中央教育棟AW401教室にて開催されました。

開会に先立ち、馬場善久学長は、2003年から本学が組織的にアクティブ・ラーニングを導入したこと等を紹介し、今後も学年進行に応じたアセスメント体制の構築やアセスメントツールの開発、質の高いアクティブ・ラーニングの導入に積極的に取り組んでいくと挨拶しました。

第1部では、本学CETLセンター長（当時）の関田一彦教授（現在、学士課程教育機構副機構長、SPACEセンター長）より、推進本部を代表し、AP事業における2015年度の取り組み概要が報告されました。続いて本学経営学部長の栗山直樹教授ならびに同学部の平岡秀福教授よりAP先導学部の取り組み事例としてアクティブ・ラーニングを導入した授業の紹介が行われました。最後に、本学SPACEセンター長（当時、現教務部長）の西浦昭雄教授より「ピアサポーター（シニアSA）養成の試み」について報告があり、2016年度から本学で開講するリーダーシップ養成科目などの紹介がありました。



副機構長 関田一彦教授

第2部では、初年次教育学会会長・久留米大学文学部の安永悟教授を講師に迎え、「読む力・書く力を伸ばすアクティブ・ラーニング」のテーマで講演が行われました。はじめに初年次教育の目的・内容ならびに接続教育の役割について触れられた後、その教育方法の実践例として、読む力・書く力を伸ばすLTD基盤型アクティブ・ラーニングの授業例が紹介され、論理的な言語技術をどのように育成していくかについての話がありました。そして、学習目標の達成に向けて、仲間と心と力をあわせて真剣に学ぶ「協同」の精神を学生間に育むことが学びを支えていくことになると強調しました（詳細は本機構発行の紀要に掲載予定）。



講師 安永悟教授

参加者からは「多くの新しい取り組みがなされていることに驚きました。登壇された先生方は非常に活動的に取り組まれているようですが、全学に展開する際の工夫に興味を持っております」（学外教員）、「初年次教育の重要性をとて納得することができました。論理的に考える素地を作る教育の基本についてヒントをいただきました。ありがとうございました」（本学教員）などの声が寄せられました。

学士課程教育機構新体制

■機構長 田中亮平

CETL センター長 望月雅光
 SPACE センター長 関田一彦
 WLC センター長 尾崎秀夫
 GCP ディレクター 西浦昭雄
 グローバル・コア・センター センター長 小出稔

■副機構長 関田一彦

副センター長 西田哲史
 副センター長 山崎めぐみ

コーディネーター 佐々木諭

<新任教員>

学士課程教育機構 准教授 佐藤広子

WLC 准教授 ロバート・ハミルトン
 講師 マルチェラ・モルガンティ
 ケリー・ケイ・マカティ

ロバート・ウォーカー ナサニエル・フィン
 キャメロン・ハイ

助教 赤間主計

堀登起子 リン・ミンイン

CETL/SPACE 助教 青木美寿華

三好香里 宮原千咲

<総合学習支援オフィス（職員・異動人事）>

部長 下出博喜

学習支援課 副課長 鈴木正宣



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第11号
 発行日 2016年7月15日
 発行者 創価大学学士課程教育機構
 〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<http://seed.soka.ac.jp/>



NEWSLETTER SEED